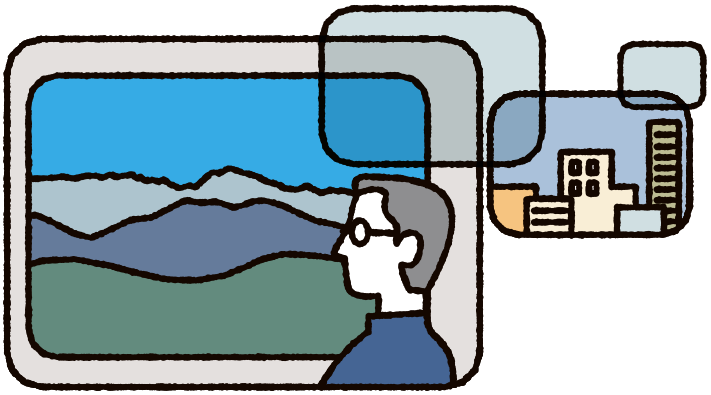
あずさ２号

小松 和彦



列車の号数名を長く記憶することなど滅多にない。しかし、中央本線を走る「あずさ2号」は別だろう。愛する人とのこれまでの暮らしを諦め、新しい恋人と新宿駅八時ちょうど発の特急あずさ2号に乗って信州へと旅立つ女性の複雑な心情を歌った、狩人の『あずさ2号』が大ヒットしたからだ。これにあやかって、わざわざあずさ2号に乗って信州への旅にでかけた人も多かったのではなかろうか。

別れ歌の多くは、吹雪舞う寒々とした北国へと旅立つ。しかし、都倉俊一・作曲、竜真知子・作詞のこの曲は、春まだ浅い信州へと向かう。そこには悲しさ・辛さを胸の奥に秘めながらも、再生への希望も託されている。

当時のあずさ号のほとんどは、新宿と松本を往復していた。乗ったことがある方は気づいたと思うが、その車窓からの景色が素晴らしい。山国の景観がパノラマのように展開するからだ。民俗学を専門の一つとしてきたこともあって、この歳まで日本各地を巡り、このためたくさんの列車を利用してきた。しかし、わずか数時間の旅程で、これほど変化に富んだ車窓からの風景を見たという記憶がない。まさに山あり、谷あり、盆地や湖ありで、しかも富士山や八ヶ岳、南アルプスから北アルプスまで眺望できる。しかも、地形の多様さだけではなく、四季に応じて違った顔を見せる豊かな風景も味わい深い。

実は、私はあずさ号、とりわけあずさ2号には格別の思いを抱いてきた。というのも、『あずさ2号』がヒットしていた一九七七年に、大学教師としての最初の勤務校・信州大学に採用されたからだ。採用されるかどうかわからない期待と不安が入り混じった気持ちを抱いて面接に臨んだときに乗ったのも、あずさ2号だったし、単身赴任ということもあって、週末には東京に帰り、週明け早々松本に戻るときに利用したのも、やはりあずさ2号だった。私はそんなあずさ号の車窓に展開する風景に、起伏に富んだ人生のありようも見出していたように思う。

昨年の三月、私は松本から始まった四十年あまりに及ぶ大学教師生活に終止符を打った。ところが、奇しくも同じ昨年の三月、ダイヤ改正でそのあずさ2号も中央本線の時刻表から完全に姿を消すという報に接した。不思議な因縁を感じて、コロナ禍が落ち着いたら、あずさ号で信州への旅をしたいと思わずにはいられなかった。そのときは、冬まだ遠い初秋がいいだろう。

（こまつ かずひこ　国際日本文化研究センター名誉教授）